

看護部

1. 2019年度看護部総括

看護部長

久保 ひろみ

2019年度、看護部は21名の新採用看護師をむかえ、常勤看護師・助産師284名（育休産休除く）でスタートし、前年度比5人減、さらに正規看護師の実働人員は263.2人と厳しい状況となりました。

2019年度は、「救急対応強化」「高齢者対応の強化」「社会状況に柔軟に対応」を掲げ、事業展開してきました。また、診療科の拡大に伴い、限られた人員の中でも、看護職として専門性を発揮しながら効率的な運用を推進していきました。

診療科拡大

2019年7月救急科開設しました。十分な人員配置ができない状況で開始しましたが、救急・ICUユニットにて運用することにより効率的な人材活用となり、救急受け入れも問題なく行うことができています。

さらに、2020年度小児心臓血管外科・心臓血管外科開始に向けての準備や教育支援をしてまいりました。手術室やICUスタッフを県外の医療施設に長期研修に派遣、実際の手術や集中治療を学ぶことにより、その知識・技術の修得と運用構築に役立てることができました。次年度は、実践において活躍してくれることを期待しているところです。



地域包括ケアシステムへの貢献

医療需要度の高い小児に関しても、在宅療養支援の取り組みを強化していきました。小児から高齢者に向けた全世代にむけて、在宅で安心した療養生活がおくれるよう退院支援・退院前訪問・退院後訪問を推進してまいりました。

今後は、さらに後期高齢者の入院割合が大きくなっていくなか、「高齢者にも強い組織」にするために、人材育成とともに、高齢者サポートチームの活動を支援していきます。

災害対応

- ① 台風15号と19号暴風雨により、千葉県内全体に甚大な被害が発生しました。当院は断水・完全停電は免れたので、被害は最小限にすみしました。千葉県全域の被害状況から、DMATや災害派遣ナースの依頼があり、DMAT隊員と災害派遣看護師3名を派遣しました。災害派遣看護師は、停電・断水のなか、病院や避難所で患者や住民のケアに従事しました。当院では、被災病院に入院していた患者受け入れを実施しました。
- ② 6月には施設の老朽化による水漏れが発生しました。病床全体に被害が及びましたが、職員の迅速な対応で被害は最小限にすむことができました。

人材育成

地域包括ケアの推進の中、入職時からいずれは地域で在宅療養を支援したいと訪問看護など地域へ転職希望者が年々多くなる傾向があります。今後の地域を支える看護師の働き方としては必要と考えます。急性期病院の当院としては、小児から高齢者まで地域のニーズに応えられるような社会人基礎力、専門職業人として看護実践能力を身につけさせて、地域に送り出したいと考えます。さらに、自然災害や大規模災害による被災者の生活を支える視点からの災害看護も必要になってくると考えます。

このことから、地域との連携を深め、継続した看護を提供できる地域包括ケア時代をささえるジェネラリストの育成が必要です。組織の役割・課題を認識し改革、挑戦していける自律した専門職育成を目指していきたいと考えています。日々、看護の質向上に努め「看護でも選ばれる病院」になれるよう、今後も努力していく所存です。

2. 業務実績

副看護部長 松川 菜穂美

厚労省による適時調査を受けました。病院機能や患者の重症度、看護の必要度に見合った適正な看護師・看護補助員の配置がされている、また地域を含めた包括的な患者支援の充実が図れている等、届け出ている施設基準が適正であると評価を受けました。

日中・夜間とも看護師や補助員の部署間でのリリーフを行い限られた人員を効率的に活用し、安全で安心できる質の高い看護を提供しました。

救急科の設立に伴い、救急外来とICUの整備をし、患者受け入れ体制を構築しました。また、次年度拡充を計画している移行期医療、心臓血管外科の体制の構築も進めています。

3. 労務・総務 実績

副看護部長 川村 美穂子

2019年4月より「働き方改革を推進するための関係法律の整備に関する法律」が順次施行されました。医療現場においても長時間労働の是正や夜勤・交替制勤務の負担が今後の課題とされています。そのような中、看護職が健康で働きやすい職場を目指すため、年5日の年次有給休暇の確実な取得推進と労働時間管理の適正化に取り組みました。

平均年休取得は、一人あたり15.9日、年5日の年休取得達成率100%という結果でした。昨年度より厳しい人員配置の中、リリーフ体制も活用し業務の効率化に努め一人あたり5時間/月（昨年より0.9時間増）という結果でした。看護職がやりがいを持ち、年齢やライフステージにかかわらず心身共に健康で働き続けられるよう、引き続きヘルシーワークプレイス（健康で安全な職場）に取り組めます。

4. 教育実績

副看護部長 竹田 貴子

千葉市立病院看護職員キャリア開発ラダーが施行され、3年が経過しました。今年度は、看護師長・主任看護師が、キャリア開発ラダーを用いて具体的に指導・支援できるよう、学習会やリフレクションに取り組みました。さらに、看護師長・主任看護師が自身の管理実践能力の向上を目指すことを目的に、マネジメントラダーを活用し、管理実践事例の記述と実践の共有に取り組みました。

院内研修では、得られた学びを実践につなげられるような取り組みを行いました。具体的には、集合研修とOJTを組み合わせた研修になるよう研修方法を見直していきました。さらに、教育委員会のメンバーがファシリテーターとなり、研修後の報告会や伝達講習を積極的に行いました。

次年度も、組織での役割・課題を認識し、自ら挑戦していく専門性のある看護師を育成していくことが課題です。

今年度は「学生にも選ばれる病院になる」ことを看護部のビジョンの1つに掲げ、各種事業に積極的に参加しました。学校訪問や就職説明会では看護部の日常の様子が参加者に少しでも多く伝わるように、先輩看護師が就職した頃の気持ちを語る場面もありました。また、今年度は病院見学会を海浜病院のみで開催する企画を実施しました。さらに、看護学生だけでなく既に看護師免許を取得している方の雇用をWebやポスターを利用し、就職希望者の獲得に努めました。広報活動では看護部の最新の情報が公開されるようにホームページの更新を随時行いました。

看護部の理念

私たちは病院理念に基づき、市民の皆様に信頼される質の高い看護を提供します。

基本方針

1. 人権を尊重し、安全・安心な看護を実践します。
2. 地域との連携を深め、継続的な看護を提供します。
3. 知識・技術・感性を磨き、自律した専門職を育成します。

2019年目標

1. 患者を尊重した、思いやりのある看護を提供する。
2. 組織での役割・課題解決を認識し、自ら挑戦していく。
3. お互いを尊重し合い、対話のある職場環境をつくる。
4. 病院運営に参画する。

看護職員状況

1. 看護配置状況 2019年4月時点 病床数： 293 床 看護単位：9単位

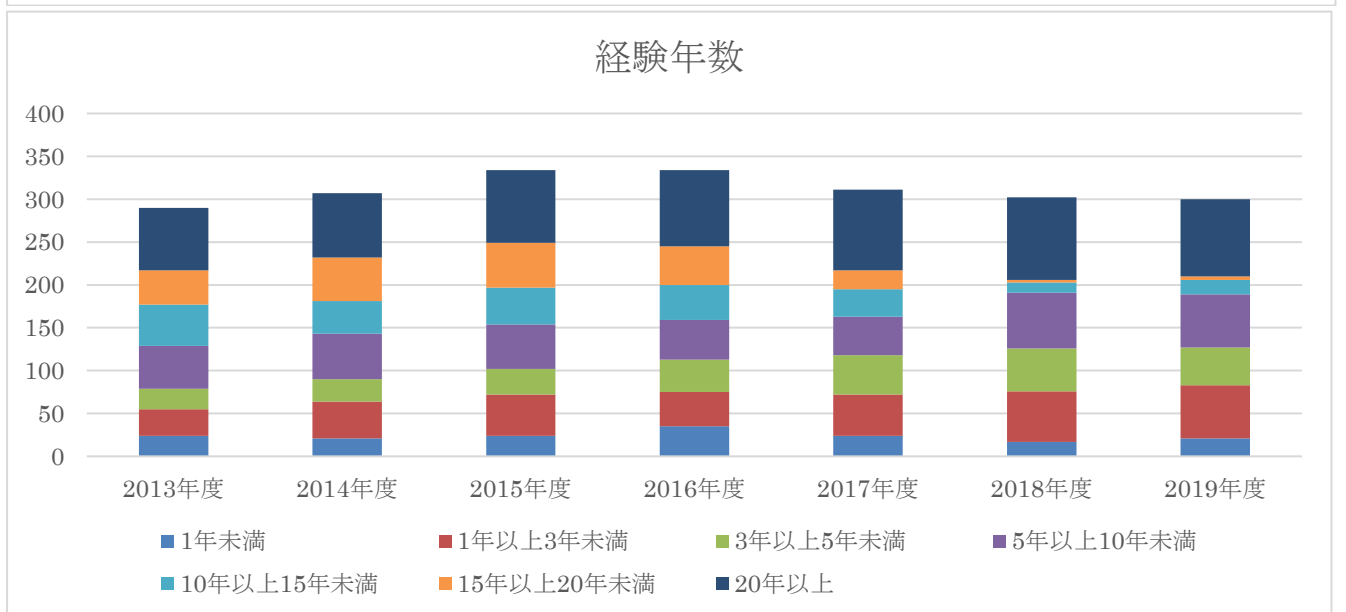
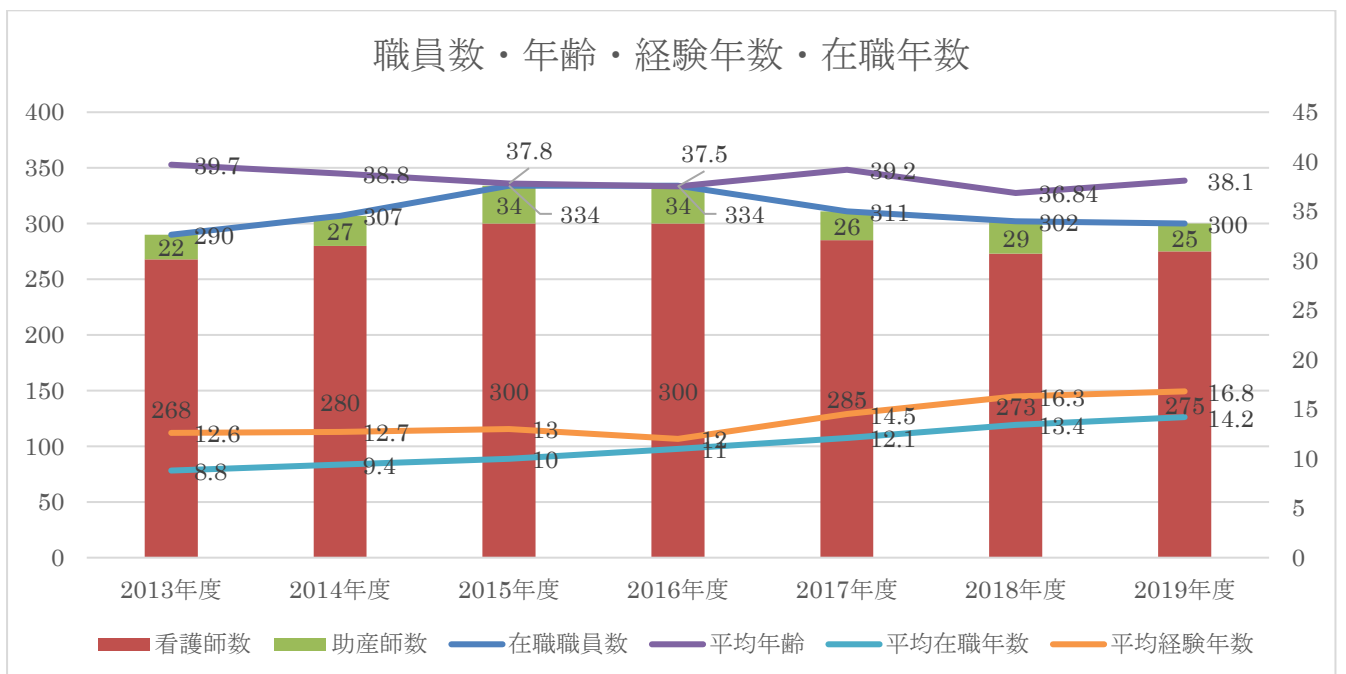
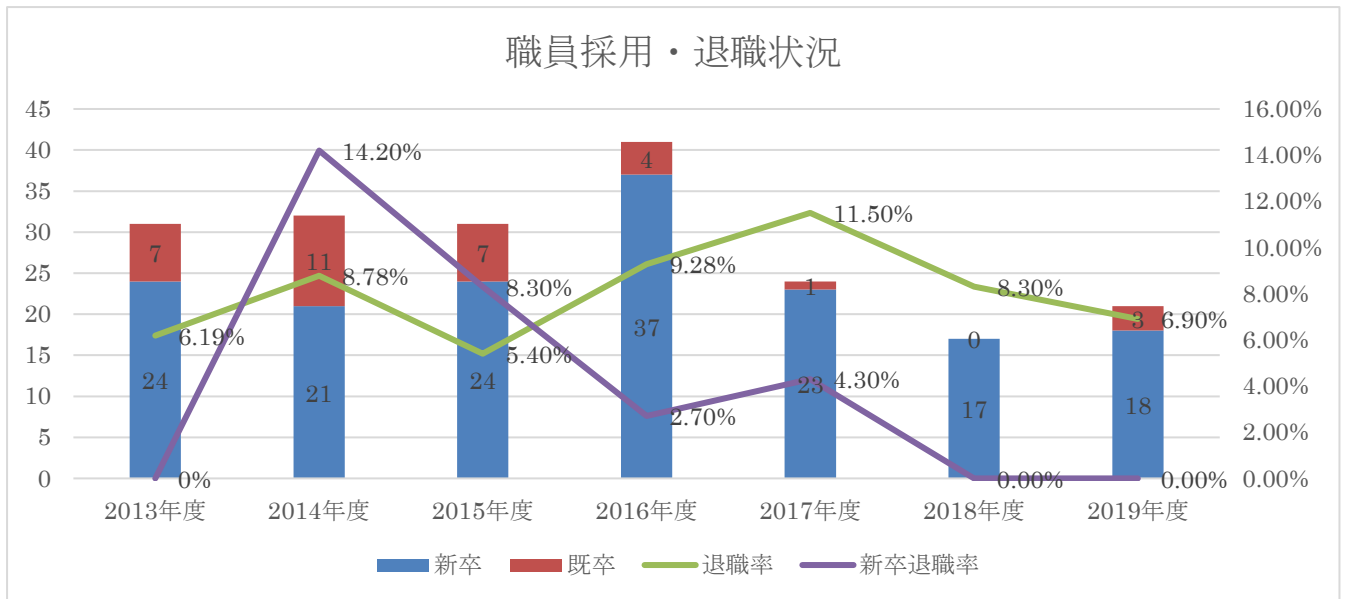
看護要員：看護師 270名 助産師 26名 介護福祉士 3名 看護補助員 5名

病床数変更：

看護単位	病床数	看護配置体制	備考
7Fユニット	44床 (MFICU：3床)	7対1 (MFICU：3対1)	
6Fユニット	53床	7対1	
5Fユニット	50床	7対1	
4Fユニット	44床	7対1 小児入院医療管理料4（12床） 12月～	
3Fユニット	42床	小児入院医療管理料1 常時7対1 夜間9対1	
NICU	21床	総合周産期特定集中治療室管理料2 常時3対1	
GCU	25床	新生児治療回復室管理料 常時6対1	
ICU・CCU	14床	ハイケアユニット入院医療管理料 常時4対1	
手術室	5部屋		

2. 職員動向：

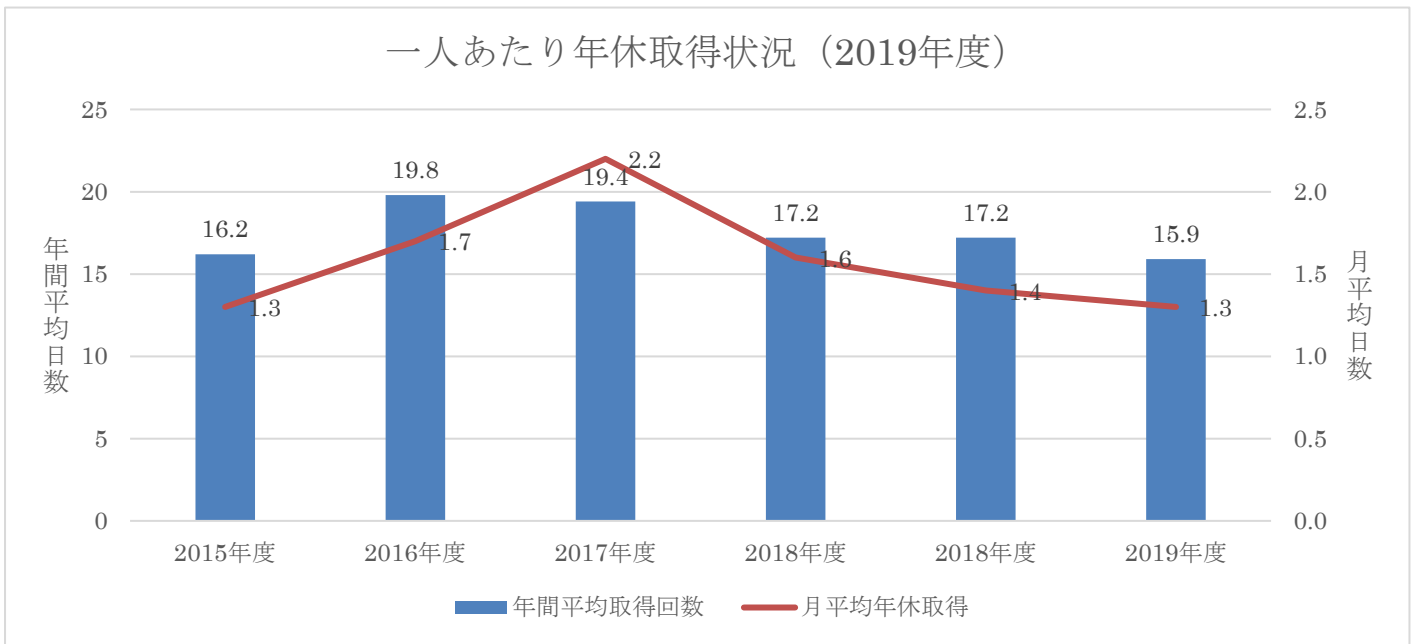
① 職員数・平均年齢・平均在職年数・平均経験年数



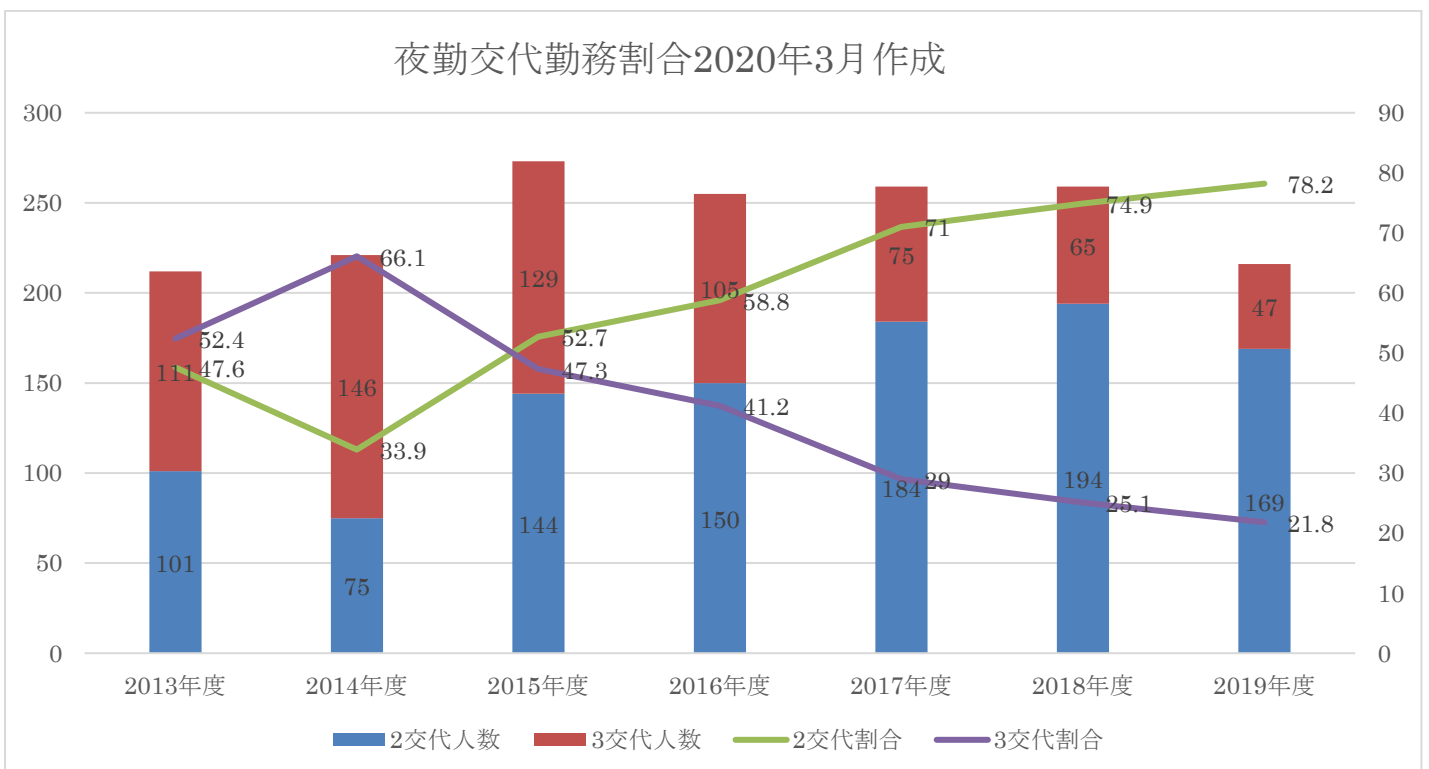
② 2019年度 産休・育休・特別休暇等の取得状況

	産休	育休	部分休	育児短時間 夜勤無	育児短時間 夜勤有	介護	病休	休職	計
人数	14	17	18	11	8	2	17	1	88

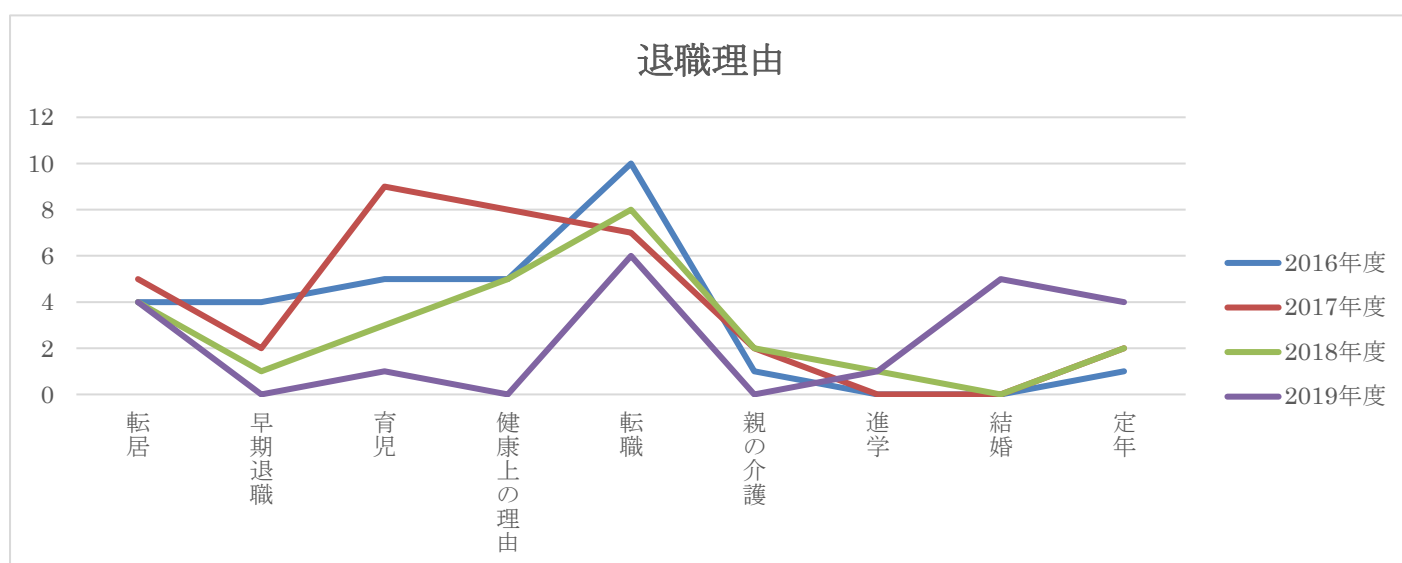
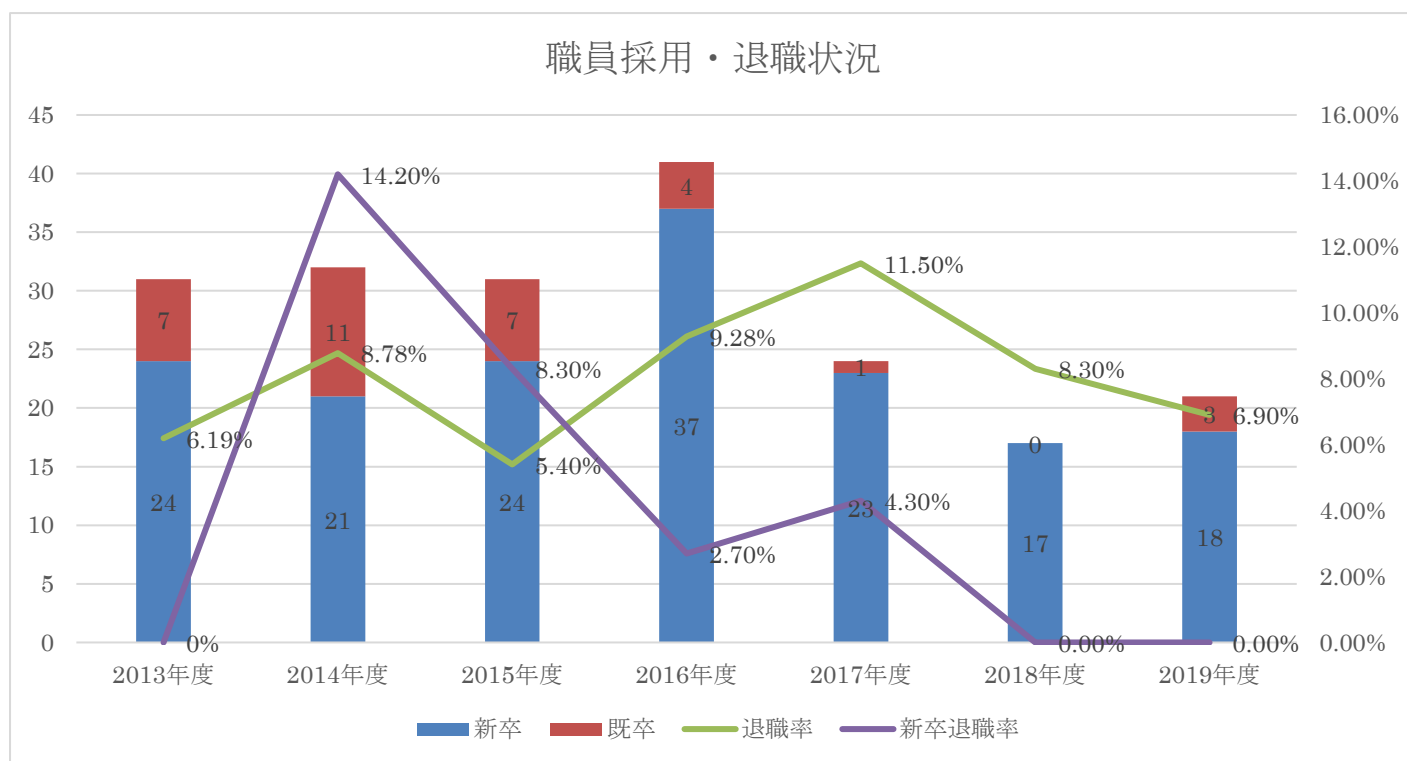
③ 年休取得状況



2. 夜勤選択割合（2交代と3交代）



4. 採用と退職者数



2019年度研修受講状況

	全体	フルタイム 勤務	部分休 勤務	短時間 勤務
研修対象者数 (人)	283	247	18	18
院外研修・学会受講数 (件)	259	232	18	9
平均受講回数 (回)	1.09	1.06	1	0.5
受講率 (延)	109%	106%	100%	50%
研修未受講数 (人)	47	38	2	7
未受講者率	17%	15%	11%	39%
e-ラーニング受講率	89%			

看護部 2019 年度委員会活動

各委員会	活動内容
教育委員会	<p>看護師長・主任看護師が、キャリア開発ラダーを用いて具体的に指導・支援できるよう、学習会やリフレクションに取り組んだ。院内研修は、集合研修と OJT を組み合わせた研修になるよう研修方法を見直した。さらに、教育委員会のメンバーがファシリテーターとなり、研修後の報告会や伝達講習を積極的に行った。</p> <p>今後も、組織での役割・課題を認識し、自ら挑戦していく専門性のある看護師の育成を目指す。</p>
臨地実習指導委員会	<p>「学生にも選ばれる病院」を目指し、2017 年度より臨地実習指導者要綱・臨地実習指導者マニュアルを作成、全体オリエンテーション内容と方法を見直し、病院・外来部門の説明用パワーポイントも作成した。また、学生指導の質を担保するために、2018 年度に 8 回開催した勉強会を基に今年度は、グループワークで学生申し送り記録の書式統一・指導者に対する評価表作成・委員会主催の勉強会の準備をおこなった。そして、3 年間の活動を QC サークルで発表した。今後も指導者が課題を見つけながら指導者像を描き、役割モデルになることを目指していく。</p>
業務・改善用具検討委員会	<p>前年度からの継続課題に取り組んだ。その結果、与薬カートの使用方法を、1 患者、1 引き出しで、1 週間分の内服薬が管理できるよう、各部署における与薬トレーの統一を行った。また、ベッド管理の方法を統一した。各科で保有しているベッド数・種類・購入年について明確にし、点検方法についても、各科で共通の書式を活用して運用を開始した。</p> <p>今後は、現在の医療に対応した質の高い看護を提供するため、業務の改善を行うとともに、看護用具・医療機器管理および整備を図っていく。</p>
記録委員会	<p>教育キャリアラダーに沿って新人対象の「看護診断・記録基準」「看護必要度」研修（ラダーⅠ）、看護記録の基礎①（ラダーⅡ）、看護記録の基礎②（ラダーⅢ）と段階的に研修を実施した。また、「重症度、医療・看護必要度」研修は各病棟スタッフが講師となり複数回実施した。さらに、全部署対象に看護記録と必要度の監査を 2 回/年実施し、結果をフィードバックして基準に沿った記録を目指した。</p> <p>今後は地域と連携できるような記録や看護サマリーの充実を図り、継続看護につながる支援をしていきたい。</p>
看護研究会	<p>会員同士の親睦が図れるように新人歓迎会を開催することができた。参加者は、看護師 88 名、コ・メディカル 7 名の合計 95 名であった。さらに、デスクトップパソコンを 2 台購入し、図書室に設置した。</p> <p>また、看護研究総会において、本会の名称が看護師助産師会に変更された。</p> <p>今後も、看護師・助産師同士の親睦・研究・教育を通し自己研鑽を図れるよう、会員の支援を行っていきたい。</p>

看護部実績 専門領域の強化

日本看護協会認定の専門看護師【母性】1名、認定看護師【新生児集中ケア、緩和ケア、糖尿病看護、皮膚・排泄ケア、集中ケア、感染管理、乳がん看護、がん化学療法看護、摂食・嚥下障害看護、認知症看護】16名は、質の高い看護を提供するとともに、院内・院外の講師として活躍している。

また、学会認定の認知症ケア専門士取得者は、「院内デイケア」の計画など増加する高齢者への活動を積極的に行っている。

看護部 リソースナース会 活動状況

分野	集中ケア：町田 裕子
実践	人工呼吸管理患者を中心に、ケアバンドルなどを用いて標準的な看護実践を目指し関わっている。
指導	2017年度から院内看護師のフィジカルアセスメント能力の向上を目指し、ラダーチャレンジレベルⅢ以上を対象とした研修を継続している。2020年度以降は、フィジカルアセスメント研修を経年別研修でも開催する予定である。
相談	研修などの機会を通して、集中ケア認定看護師が対応できる相談内容などの広報活動を継続している。医療機器装着患者へのケア等への相談には柔軟に応じている。

分野	皮膚・排泄ケア：鈴木 修子
実践	新人研修をはじめとし、2019年度に講師を担当した院内・院外研修は13件であった。院内褥瘡管理では、新規褥瘡患者132名が計上され、褥瘡回診実績は延べ314件となった。褥瘡対策チームによる多職種の視点からアセスメントを行い、患者さんの立場で考えることの大切さを現場に伝えられるよう努力した1年であった。褥瘡教育の必要性を感じ、病棟で核となる看護師を育成するため、5研修からなる「褥瘡コース研修」に取り組んだ。外来ストーマケア実績は176件となり、2019年10月からは在宅療養指導料の算定を得ている。院内コンサルテーションでは難治性の術後離開創の管理に力を注いだ。今後も一人でも多くの患者さんの笑顔がみられるよう、ケアの専門性を高めていきたい。
指導	褥瘡回診を通し、褥瘡のアセスメント方法や管理方法の普及と指導を行った。また管理困難なストーマを有する患者さんのケアについて、病棟看護師や訪問看護師と情報の共有を図り、ケアの具体的な指導を行った。2020年度は褥瘡およびストーマケア分野で力を発揮できる看護師の育成に努めたい。
相談	新規院内コンサルテーション39件、その後の病棟訪問は延べ105回であった。地域活動として市・県のおストミー協会での講演と相談対応を行った。また千葉市内の看護師を対象に年2回、スキンケアフォーラムを開催し、ケア困難事例の相談に応じている。

分野	緩和ケア：高島 美智子
実践	患者・家族のQOLを重視した関わりを目的として、緩和ケア外来・がん看護外来での相談（緩和ケア相談件数：30名）を行っている。終末期患者の意思決定に寄り添いながらアドバンス・ケア・プランニングを取り入れ、その人らしい生活を送れるように関わった。地域との連携も積極的に取り組んでいる。
指導	2018年度より2年コースで、チャレンジレベルⅢ以上を対象とした院内における緩和ケアの中心となる看護師を育成するための研修を行っている。研修修了後は各自が病棟のリンクナースとして活動できるように、継続した指導を行っている。
相談	病棟カンファレンスを活用し、スタッフの相談を実践対応で解決できるように取り組んでいる。今後は専門知識を活かし、地域のサポートチームからの相談にも対応していきたい。

分野	母性看護：阿部 祥子
実践	地域のニーズ・現在の社会状況を総合的にアセスメントし、現状の助産師外来における問題点を抽出した。まずは児の体重測定を助産師外来だけでなく、病棟で実施できるようにシステムを構築していく。
指導	病棟において気になる事例の振り返りを企画し、実施した。今後も事例についてスタッフ間で共有し、看護力向上を目指していく。
相談	病棟スタッフからの患者ケア（主に妊産婦・母乳・退院支援など）に対する相談に対応した。今後は他部署からの授乳や妊産婦に関する相談にも対応するための広報活動を行い母性看護の充実につなげたい。

分野	乳がん看護：中村 志穂
実践	初発・再発の乳がん患者に対して、身体的、心理的、社会的、スピリチュアルな状態を総合的に判断し個別にケアを計画、実践した。看護外来では延べ42件の面談を実施し、告知後の心理面のサポートや、意思決定に関する支援、リンパ浮腫ケアを行った。地域への継続看護として、退院前カンファレンス2件、退院後同行訪問1件を行った。今後も院内のみならず、地域においても乳がん看護の実践に取り組めるように努めていきたい。
指導	チャレンジレベルⅢ以上のスタッフを対象に、緩和ケア認定看護師と協働し、「がん看護（緩和）」コース研修を行っている。各部署での看護実践能力の向上を促進できる看護師の育成に取り組んでいる。
相談	5階ユニットや外来ユニットスタッフからの患者ケア、特に告知後の心理面のサポートに対する相談を受け、コンサルテーションを実施した。

分野	新生児集中ケア：伊東 真弓
実践	新生児看護の専門的知識を活用し個々の新生児とその家族に合わせた育児技術の獲得支援を行っている。また、部署のスタッフを対象に個別に合わせた育児支援看護を提供できるようOJTを実践した。今後も育児技術獲得に関して集団指導から個別支援につながるOJTを実践していきたい。
指導	部署内の新生児フィジカルアセスメント力の向上を目指して勉強会を実施した。また、2017年度より新生児蘇生法講習会を、看護部研修として年間計画で開催する体制を構築した。これにより院内スタッフのスキルアップと共に院外から継続的に参加できる体制となった。今後は院内全体に広報して新生児蘇生法の普及を目指していく。
相談	入院中の新生児の症状に関する相談に対応した。

分野 糖尿病看護：水谷 幸子	
実践	<p>当院の糖尿病外来に通院中の患者や家族を対象に、糖尿病という病気を正しく理解し、食事療法や運動療法など、患者個々が自己管理できる事を目的とした糖尿病教室の運営方法の見直しを行った。</p> <p>また、糖尿病合併症予防を目的としたフットケア外来の開設に向け企画を行い、次年度の開設を目指している。</p>
指導	<p>新入職者を対象としたインスリン療法と血糖自己測定についての勉強会を開催した。院内の看護スタッフに対しても勉強会を開催する事で糖尿病に対する知識を深めてもらい、患者に対し安全な看護が提供でき糖尿病看護の質の向上を目指していきたい。</p>
相談	<p>主に自部署の看護スタッフからの薬物療法、低血糖時の対応についての相談に対応した。糖尿病患者は院内どの部署にも存在するため、自己の存在を認知してもらえよう広報し、他部署からの相談件数を増やしていきたい。</p>

分野 感染管理：高本 京子・大内 咲絵・佐々木 みゆき	
実践	<p>病院内で発生する感染症の監視と疫学的調査、多剤耐性菌の保菌状況を把握し管理を行った。また、新型コロナウイルス感染症に対して院内の対応を整備し感染防止に努めた。手指消毒剤の使用量調査と手指消毒剤使用状況調査を実施した。</p>
指導	<p>ICT ではラウンドを通して標準予防策の遵守状況や環境整備（5S）状況を確認し指導した。AST では抗菌薬が適正に使用されているか確認し、必要があれば適正使用となるよう指導した。院内では、委託職員を含む全職員への研修を複数回開催した。</p>
相談	<p>認定看護師 3 名で看護部門の各部署を分担して担当している。相互に連携をとりながら電話やメールでの相談に応じた。主な相談は多剤耐性菌患者への対応や手指衛生教育等だった。</p>

分野 認知症看護：藤原 成美	
実践	<p>多職種による高齢者サポートチームを結成して、毎週木曜日「院内デイケア」を開催した。担当者は、デイケアの効果を前後で評価し、デイケア参加患者の具体的な変化を看護記録に残し部署へフィードバックできた。また、成人病棟のラウンドを行い、認知症患者との関わりを通じて BPSD やせん妄の予防と対応方法について具体的に記録することで、ケアの質向上ができた。</p>
指導	<p>自部署では、毎週認知症ケアカンファレンスを開催し、困難事例やケア方法について話合う事で倫理的感性を育める場をもち、ケアの質向上ができた。</p> <p>院内デイケアでは、具体的なケア方法をサポートチームの担当者に指導し、部署のロールモデルになることを目指した。</p>
相談	<p>自部署では、ケア困難時に相談を受け、一緒に解決できるよう取り組んでいる。他部署からの相談件数が少ないため、次年度は他部署の認知症ケアカンファレンスに参加し、認知症高齢者に寄り添ったケアを考える環境を構築していく。</p>

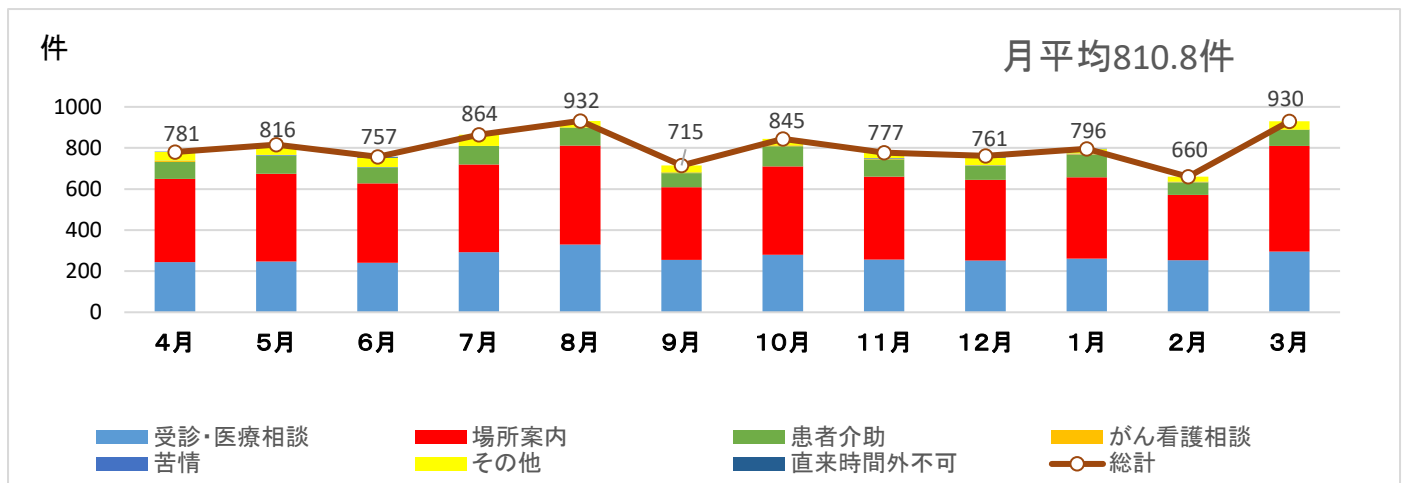
分野	摂食嚥下障害看護：樋口 智也
実践	摂食嚥下障害に関する最新の知識を持ち、NST 介入中の嚥下機能障害患者や高齢肺炎患者を対象として NST 嚥下ラウンドを開始した。ラウンドでは、患者の嚥下機能評価や適切な訓練法・口腔ケアを選択し実践している。さらに院内デイケアに参加し、潜在している嚥下障害患者を抽出し介入に繋げることができた。今年度のラウンドは 116 件であった。今後は嚥下サポートチームを立ち上げ、チーム医療としての介入を推進するための役割を目指す。
指導	NST 実地修練の実習生を対象に講義を開催した。自部署では嚥下をテーマにしたカンファレンスやミニ講座を毎週開催した。摂食訓練や口腔ケア等の実践を通じて看護職者に対して役割モデルを示すとともに具体的な指導を行なった。
相談	NST 嚥下ラウンドを通じて相談対応を行なった。コンサルテーション用紙での相談は 2 件にとどまったが、看護職者以外にも医師や管理栄養士などから口頭での相談を受ける機会が増えた。今後も実践を通して相談件数の増加に繋げる。

学会発表 一覧

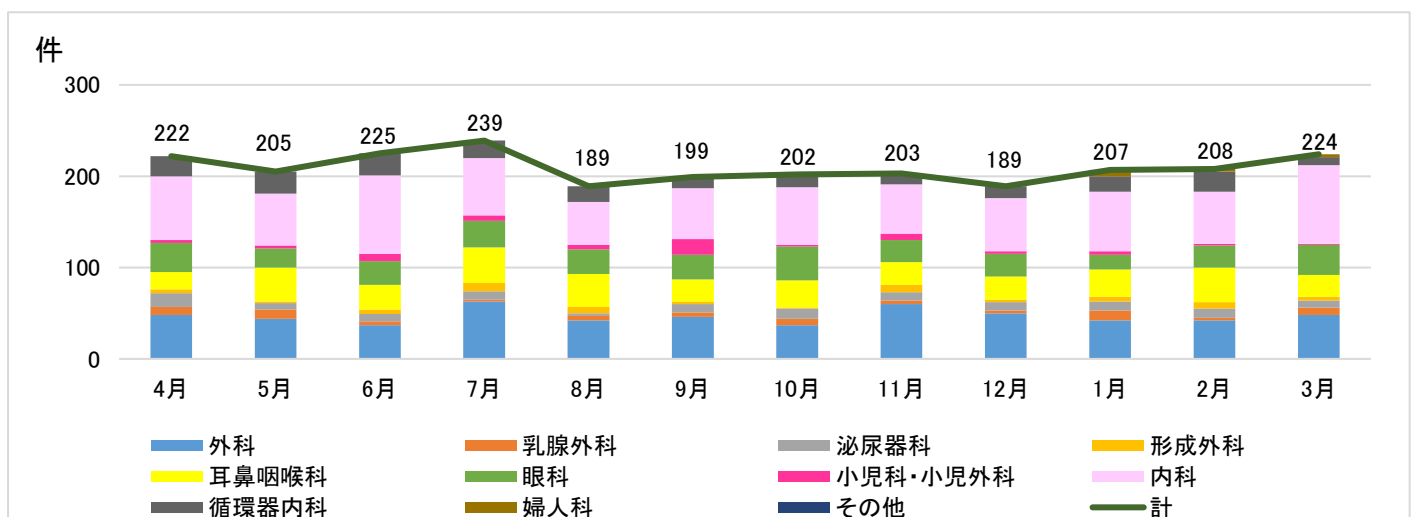
年月	所属	氏名	研究名	学会
2019 年 10 月	4 階病棟	藤原成美 他	急性期病院における高齢者サポートシステムの構築 －院内デイケアの開始とその効果－	第 58 回 全国自治体病院学会
2019 年 10 月	4 階病棟	田口理英 他	急性期病院における 高齢者サポートシステムの構築	第 58 回 全国自治体病院学会
2018 年 10 月	新生児科 病棟	嶋津由美子 大塚奈和子	新生児科から退院する児への在宅移行支援 －同行訪問の取り組み－	第 58 回 全国自治体病院学会

相談支援センター： 2019年度総合相談件数推移・退院後訪問件数推移

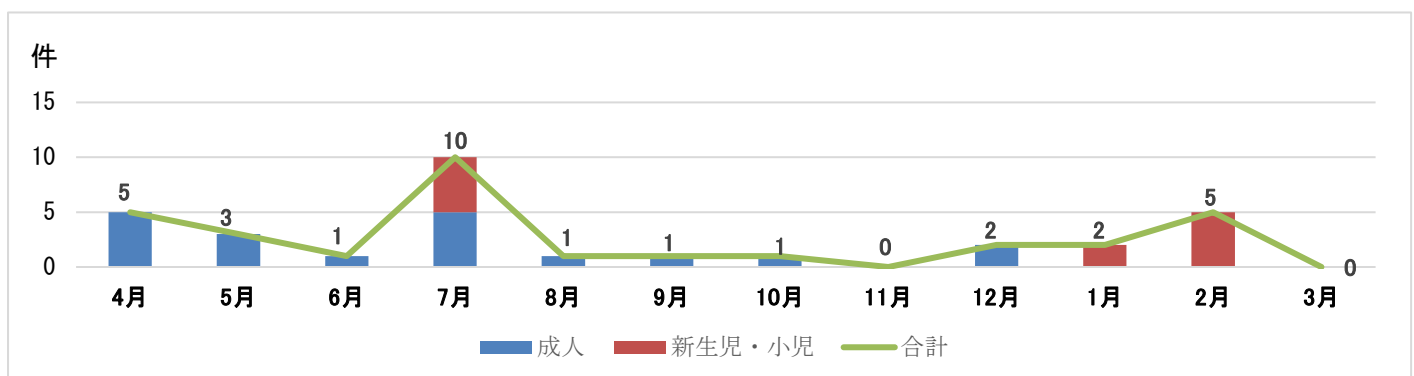
①総合相談



②入院支援



③退院後・同行訪問



総合相談件数は昨年に比べ増加し、中でも場所案内が半数を占めていた。正面玄関に立ち来院された方々の受診科相談から、地域からの電話相談も行っており、相談内容も多岐にわたっている。高齢者の入院が増えている現状から、個別性に合わせた入院支援を行い安心して入院できるよう、また入院前から転倒、褥瘡、栄養などのリスク評価を行い、安全に入院生活を送れるよう入院支援を行う。今年度は、耳鼻咽喉科の小児と婦人科の入院支援を追加実施した。地域における役割拡大のために退院後訪問や同行訪問は今年度 31 件実施した。その内訳は成人 19 件・新生児は 12 件であった。

来年度も患者中心の継続看護を行い、地域でも安心して療養できるよう病棟とともに退院支援を充実させ、退院後・同行訪問を継続実施していく。

相談支援センター： 2019年院内ミニ講座 実績

	開催日	講座名	講師名	参加者数
1	6月26日(水)	こどものホームケア	松尾 祐吾 (小児救急看護認定看護師)	15名
2	10月16日(水)	インフルエンザの予防法	大内 咲絵 (感染管理認定看護師)	16名
3	12月3日(火)	はじめよう腸活	高倉 由美子 (管理栄養士)	30名
4	2月19日(水)	健康寿命をのぼそう	八木 輝彦 (理学療法士)	開催中止

今年度は多職種の部門に講師を依頼した。受診手続きや会計及び処方箋の受け取り等の待ち時間を利用して、地域市民の健康を推進しての企画のため、参加者数には変動があった。

第3回目の開催から会場のレイアウトを変更し講義内容を聴取しやすいようにしたことは、集客にも影響があった。第4回目は新型コロナウイルスの感染予防対応として開催を中止した。

看護部主催 教育講習会開催：【新生児蘇生法】2019年度 講習会開催

	開催回数	参加者数 (院内)	参加者数 (院外)
新生児蘇生法専門 A コース	2	13	10
新生児蘇生法専門 B コース	3	6	15
新生児蘇生法 スキルアップコース	6	38	33

今年度より地域の医療機関からの受講者募集・申し込み方法は地域連携室を介するシステムに変更した。また、指導できるインストラクターが増員となり開催回数を増やすことができた。

今後も新生児蘇生法 (NCPR) の目的である「すべての分娩に新生児蘇生法を習得した医療スタッフが新生児の担当者として立ち会うことができる体制」を目指して活動していく。

院外活動：地域活動・集患 【看護部主催 公開講座】

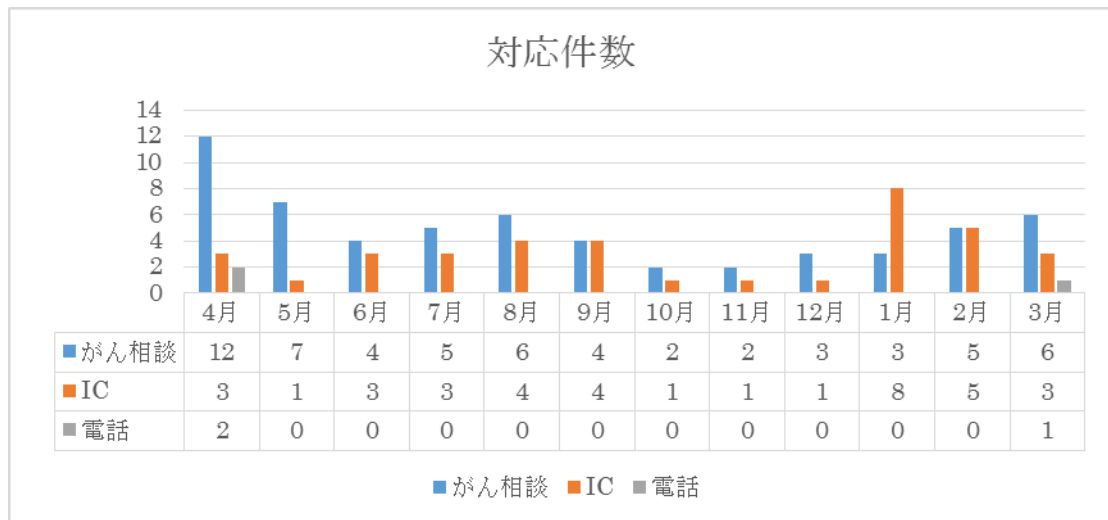
テーマ 「いきいき元気に暮らそう」

	開催日	講座名	講師名	場所	参加数
1	6月9日(日)	知らない人は損をする 健康寿命の伸ばし方	菅野 裕也 (理学療法士) 櫻井 克宣 (理学療法士)	高洲コミュニティー センター	30名
2	9月8日(日)	認知症について知ろう	藤原 成美 (認知症看護認定看護師) 高山 隆太 (作業療法士)	高洲コミュニティー センター	25名
3	11月9日(土)	子どものホームケア講座	松尾 祐吾 (小児救急看護認定看護師)	高洲 子育てリラックス館	20名 (子ども18名)
4	12月8日(日)	子どものホームケア講座	松尾 祐吾 (小児救急看護認定看護師)	高洲コミュニティー センター	5名 (子ども1名)
5	2020年 3月1日(日)	いつまでも 口から食べる幸せ	樋口 智也 (摂食嚥下看護認定看護師) 鈴木 一平 (管理栄養士)	高洲コミュニティー センター	開催中止

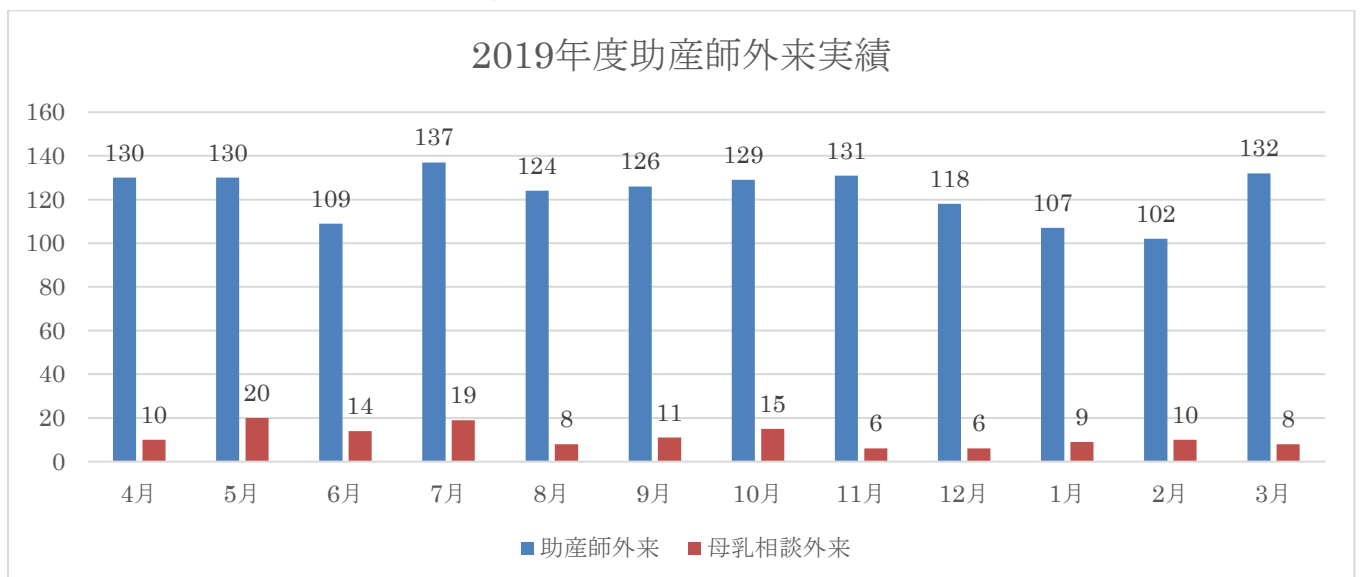
今年度も地域への情報公開・健康推進のため「生き生き元気に暮らそう」をテーマに公開講座を開催した。また、開催場所は地域住民の利便性とテーマを考慮し、高洲コミュニティーセンターと高洲子育てリラックス館とした。講師も認定看護師、管理栄養士、リハビリテーション科の理学療法士・作業療法士の多職種で担当した。参加者の年齢層は、テーマの内容で違いがあるものの20歳代の子育て世代から、80歳代の高齢者まで参加されていた。1番多く参加されていたのは70歳代であった。アンケート結果より実技と絡めた講義、簡単なストレッチや健康など、健康に関することや高齢と病気についてなどの例年通りの要望があった。3月は新型コロナウイルス感染予防対応として開催を中止した。今後も地域住民のニーズに合わせたテーマに沿う内容や開催方法の検討していく。

看護外来：【がん看護外来】・【助産師外来・母乳育児外来】 2019年度 実績

がん看護外来 （総数：91件）



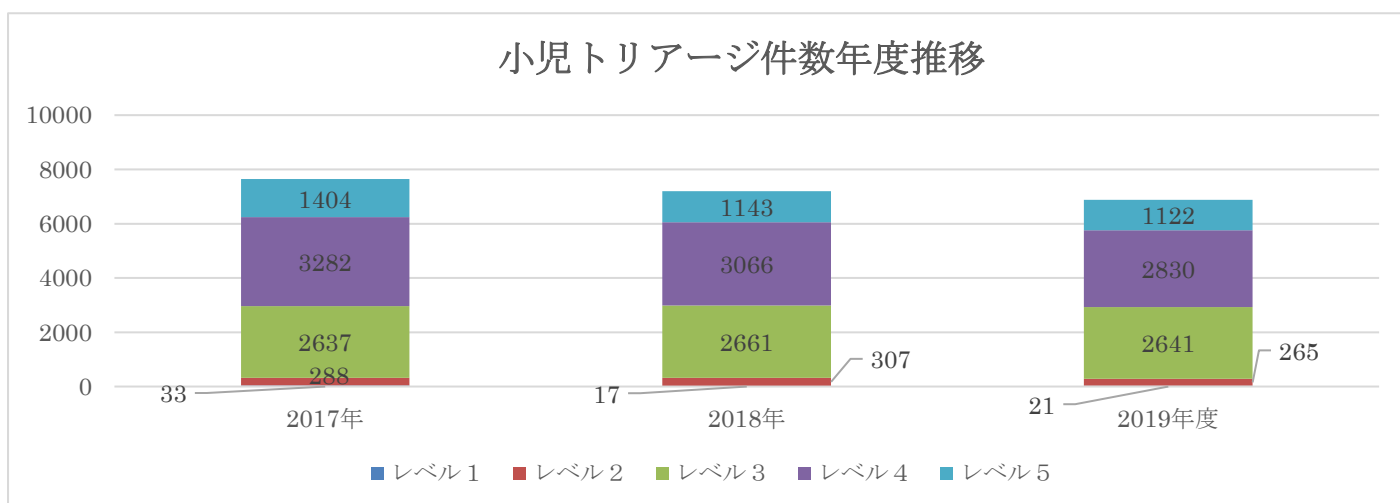
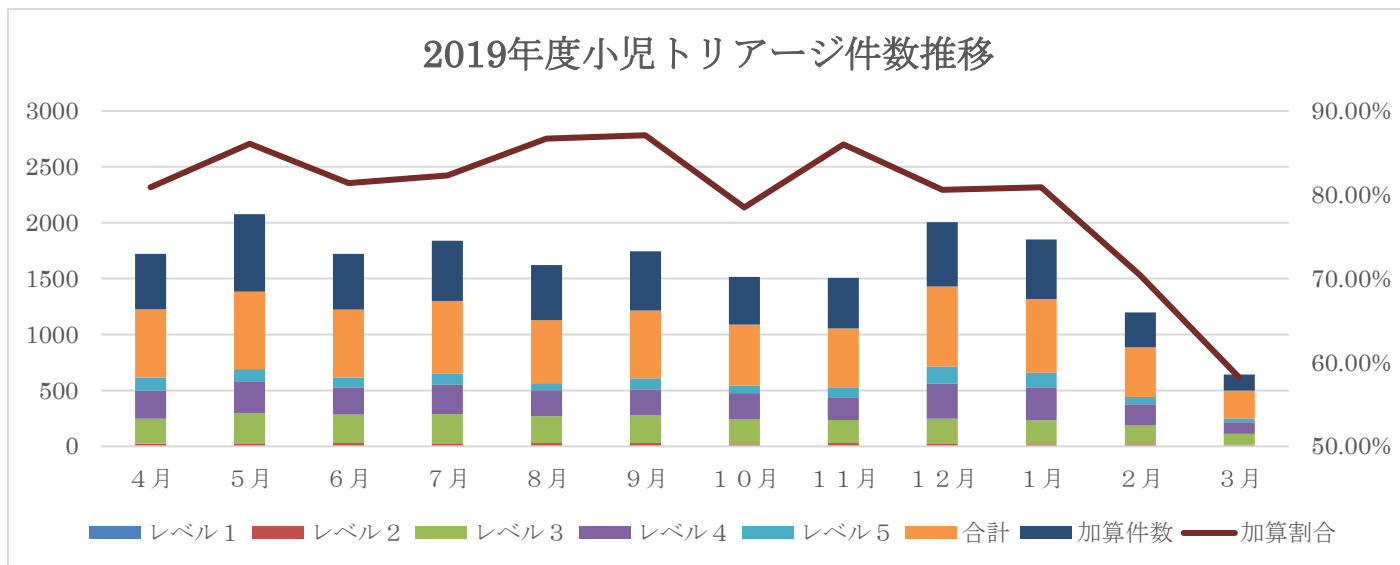
助産師外来 （総数 助産師外来：1475件、母乳相談外来：136件）



分娩件数は、昨年度から減少しており、助産師外来数も減少傾向である。

今後の課題は、産後ケアの充実・母乳推進を図るための助産師外来の仕組みを再構築していきたい。

小児救急対応の強化：【小児救急トリアージ件数】



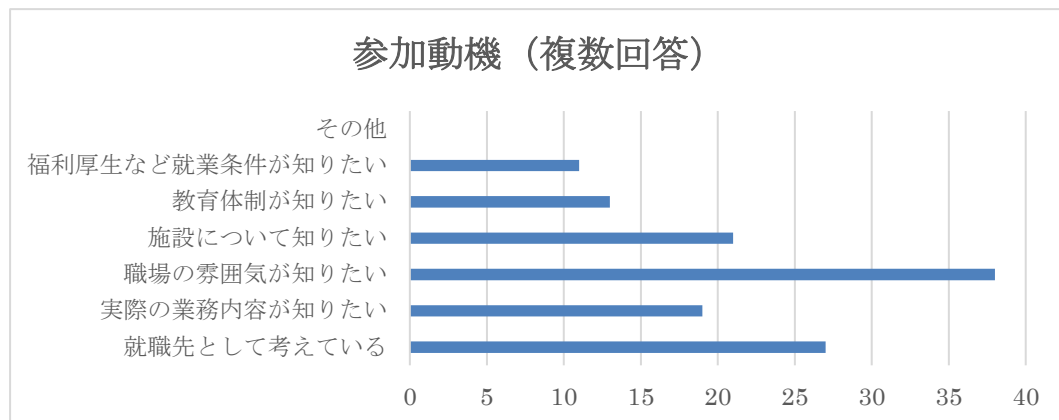
院内トリアージは開設から約5年が経過し、トリアージ件数は若干の減少傾向にある。患者数の増減は、市内での感染症流行の影響を強く受け、2019年度は年末年始及びゴールデンウィークの長期連休による受診の増加がありました。3月は政府の非常事態宣言をうけて、不要不急の外出が制限された事による受診控えがあり、著しい減少となっている。レベル別の患者割合は、どの年代でも安定して概ね同様の分布となっている。今後も、迅速で適切な緊急度分類、緊急度に応じた的確な介入をより充実させる必要がある。

人材確保：【病院見学・インターシップ参加者】

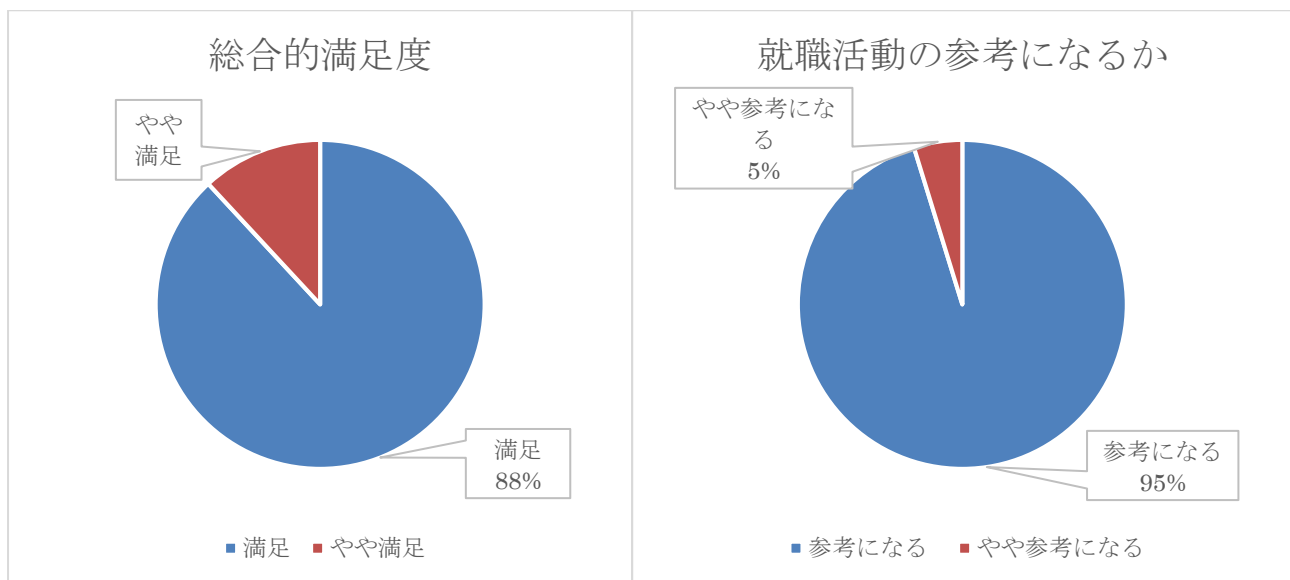
2018年夏期インターシップ開催：8月 9・10日開催 合計：29名

2019年春期インターシップ開催：3月14・15日

新型コロナウイルス対応のため開催中止

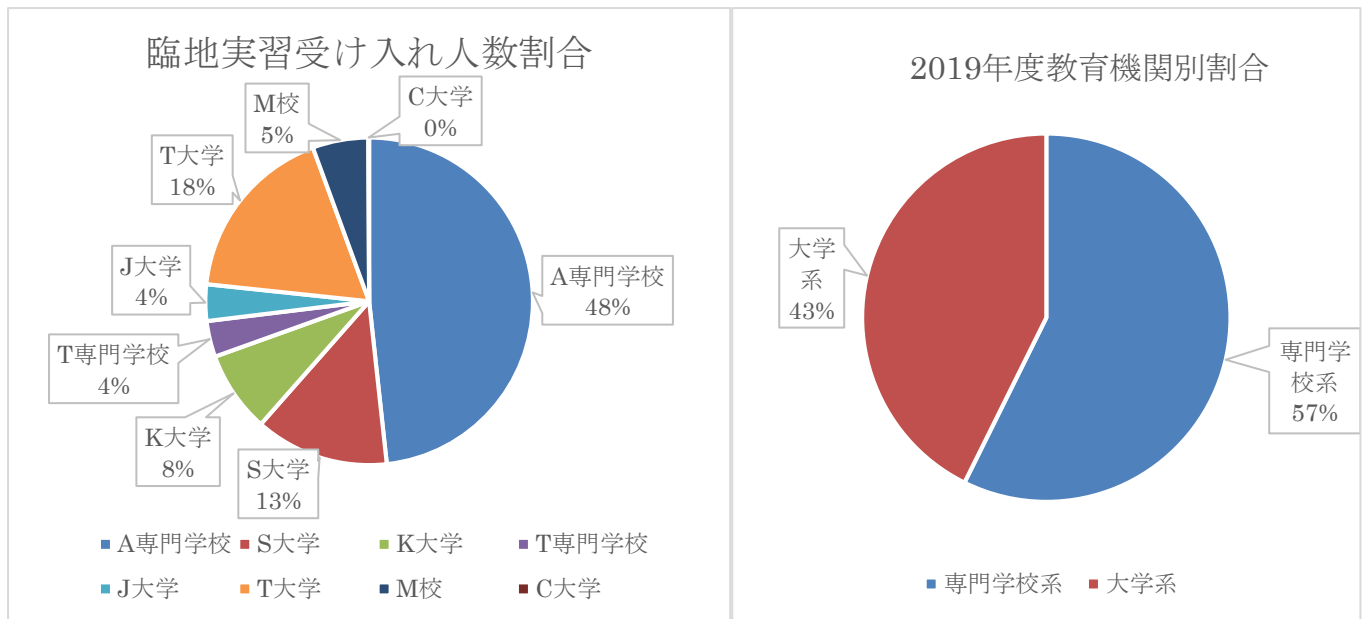


アンケート結果：



今後の課題：当院のインターンシップを選んだ理由から当院ホームページの充実が必要と考える。また、知り合いに勧められ当院のインターンシップに参加する人が半数近くいた。その知り合いは当院臨地実習経験者や教員であり、当院受験希望理由に多いことを踏まえると、よりよい学生指導・臨地実習場所になることが重要である。

臨地実習：【8 教育機関】



今後の課題： 臨地実習の質向上のため、指導者一名が 8 週に及ぶ臨地実習指導者講習会研修を修了した。年々、教育機関が増える一方、小児・周産期分野での実習受け入れ病院が減少している。そのような中で今年度は、新たに一教育機関の受け入れを実施した。

臨地実習での経験や学生が感じる病院の雰囲気は、学生にとって就職先を決定する上で重視している事項である。そのため、今後の人材確保対策として、引き続き教育機関と連携しながら臨地実習の質向上を目指していく。